

[書 評]

啓蒙主義の精神

ツヴェタン・トドロフ著

ロベール・ラフォン社刊 2006年

鈴木正昭

本書は2006年（平成18年）6月、パリのロベール・ラフォン社より刊行された。本書成立のきっかけは、フランス国立図書館のジャン＝ノエル・ジャンヌネ氏から同図書館が開催を計画していた「啓蒙主義と、その現代人にとっての意味」という催しへの参加を要請されたことによる。この催しは「啓蒙主義！ 明日への遺産」と名称を変更したうえで、2006年3月に開催された。要請を受けてから2年半後のことだった。この間トドロフ氏は同図書館のスタッフ、館外の協力者、さらには展示された250点に及ぶ作品から多くのことを学んだ。以上が本書巻末の「謝辞」から判明する事実である。

本稿はトドロフ氏の著作の要約である。本書は120ページほどの本文および数ページのノートからなっている。筆者は啓蒙主義思想に関しては通り一遍の知識しかいないため、このレジュメにも多くの間違いや誤解が見られるのではないかと危惧している。ご指摘を賜れば幸いである。

神が死に、ユートピアが崩壊した後、われわれは普段の生活をどのような知的、道徳的土台の上に築いたらいいのであろうか。責任ある存在として行動するためには、われわれの言説や行動の基盤となる認識の枠組みが必要である。こうした問題意識から氏は啓蒙主義の人道主義的側面に導かれていった。啓蒙主義とは1789年に先立つ四分の三世紀に今日のわれわれのアイデンティティーを形成することになった大きな変化である。人類は誕生して以来始めて自らの運命を手中に収め、幸福の追求を自らの至上の目的として主張することになった。この運動はヨーロッパ全土から始まったもので、特定の国から始まったものではなく、哲学、政治、科学、芸術などを通して表現された。

もちろん、今日のわれわれがこれらの思想に戻ることは不可能であるし、望ましいことでもない。18世紀の著者たちが今の時代に蘇ったとしても現代の世界を引き裂いている諸問題を解決することはできないだろう。しかし、18世紀の急激な変化をよりよく知ることは今日の社会をよりよく生きる手助けになるかもしれない。したがって、著者は現代から目をそらすことなく、

啓蒙思想の大筋を、過去と現在を行き来しながら明らかにしようと試みることになった。

1 計 画

啓蒙主義がどのような計画から成り立っていたかは二つの理由により述べるのが難しい。第一に、啓蒙主義は一つの達成点であり、総合であって急進的な革新というわけではないからである。一つひとつの要素を見ると、中世、ルネッサンス、古典時代に起源を持つものが多い。啓蒙主義は過去において戦わされていた議論を吸収し、関連付けたものであった。したがって啓蒙主義は合理主義的でもあり、経験主義的でもあった。したがってそれはデカルトの後継者であり、同時にロックの後継者でもあった。啓蒙主義の各要素は古いものであったけれどもその関連付けは新しかった。そして重要なことはこれらの思想が書物から飛び出して現実世界に出て行ったのが啓蒙主義の時代だった、ということである。

第二は啓蒙主義を担う個人がおびただしく、しかも各自が自説を強く主張して合意の形成が妨げられたことであった。啓蒙主義から生まれた思想間の対立は今日も尾を引いている。啓蒙時代はコンセンサスの時代ではなく論争の時代だった。しかしそれにもかかわらず、啓蒙主義の草案（設計図）はそれほど苦勞しなくても見出すことが可能であると著者は考えている。

氏によればこの草案の基礎にあるのは三つの思想である。それは自律、われわれの行為の人間的な合目的性、そして普遍性である。

第一の自律というのは外側の権威からの命令に従うのではなく、自らの選択と決定を最優先することである。いかなる教義も制度ももはや聖域ではなくなり、宗教からの解放が目指された運動だった。人間は自らの運命を神から自らの手中に移行させようとしたのである。人間の生活の方針を定めるのは過去の権威ではなく、人間の将来に向けた計画でなければならなかった。もっとも啓蒙主義の大部分は無神論を志向するものではなく、自然宗教、理神

論、あるいはそれらのヴァリエーションを求めるものだった。啓蒙主義の思想家たちは宗教に異議を唱えるよりは、寛容な態度で行動することや良心の自由を守ることを目指していた、と氏は考えている。

第一に獲得された自律は知識の自律だった。それはどんなに権威のあるものであっても批判を免れることはできない、という原則に発するものであった。ところで知識の源泉は理性と経験である。そしてこの二つはすべての人間が所有しているものである。理性は知識を入手する手段であり、人間の行動の動機ではない。また理性は信仰に反するものであるが、情念に反するものではない。

知識の解放が科学の開花につながった。まず物理（ニュートン）が、次いで化学、生物学、さらには社会科学や心理学が発展した。研究者たちは自分たちの仕事が人々に幸福をもたらすと信じたゆえに、万人に光をもたらしたいと考えたのである。知識が人々を解放するというのが共通の理解であった。したがって、研究者たちはあらゆる形態の教育に熱心であったし、専門的な書物や一般大衆に向けた百科事典の出版による知識の普及にも熱心であった。

自律の原理は個人の生活だけでなく社会生活にも及ぶものなので言論、出版の自由の要求を引き起こした。それはあるがままの人間を受け入れることを求め、あるべき人間を受け入れることを拒絶した。現実の人間の観察から見えてくるのは、従来の抽象的かつ理想化されたイメージではなく、国によっても、一人ひとりの個人をとっても異なった存在であった。そこから小説および伝記という個人を中心に据えたジャンルが発生した。これらのジャンルでは人間の行為の永遠の法則や個々の行為の模範的な性格を明らかにすることではなく、特殊な状況におかれた個々の男女を提示することが目標とされた。絵画もまた神話的、宗教的な主題ではなく、日常生活の中で把握された人間を表現するよう変化した。

またこれと併行して芸術家とその実践に対しても新たな評価がなされるようになった。彼らはもはや単なる娯楽の提供者でも、神、王、主人に仕える

人でもなく、創造者として自らが作品制作の主人公となった。

さらに、自律の要求は政治の世界をも変化させた。それは世俗と精神の世界の分離を完成させた。啓蒙主義の思想家のあるものは自らの思想を君主たちに説き、政治の世界を変えようと試みた。こうした試みは啓蒙専制君主を超えて二つの原則を導き出した。一つは君主制という古い制度が新しい内容を持つようになったことである。すなわちすべての権力は人民のうちにあり、一般意志を超えるものは存在しないという考えである。もう一つは個人の生活という限定された世界においては個人の自由はすべての権力の介入を受けないという原則である。これを実現するため、権力の複数体制と平衡が求められた。いずれの場合においても神学と政治の分離が完成した。

こうして個人は信者でありながらも社会のあらゆる分野では世俗化が進行していった。この考えは司法の世界にも及び、犯罪と宗教上の罪が区別され、前者のみが処罰の対象とされるようになった。教育の世界では教会の介入が排除され、啓蒙主義の普及を促進する場所となった。学校はすべての人に開放され、無料で義務化された。経済の世界では財の流通が恣意的な制限から解放されて自由化された。経済は労働の価値や個人の努力に立脚すべきものとなった。これらのすべてに最も適した場所は大都市であった。

人間は以前と異なり、地上での生活に意味を付与しなくなってきた。幸福の追求が救済に取って代わった。国家も神の意図の実現ではなく、国民の幸福の追求をその目的とするようになった。私生活を重視することが正当化されるようになった。

人間は生まれながらに譲渡することのできない権利を所有しているということが個人にとっても共同体にとっても当然視されるようになっていったのであるが、これは17、18世紀の自然権から啓蒙主義が継承したものである。人間は社会という枠組みの中で享受している権利のほかに、文書化されてはいないけれども前者に劣らず絶対的な、生きる権利を持っていることが承認された。それを認める限り死刑には正統性はないことになる。私的な殺人が犯罪であるならば、公的な殺人も同じく犯罪だと考えるべきである。人間は

すべて肉体を完全な状態に保つ権利がある。だから拷問はたとえ国家理性の名のもとでおこなわれようと正当化することはできない。

人類の一員であること、普遍的な人間であることはある社会に属すること以上に根源的なことである。自由の行使も普遍性や宗教的な色合いを持たない聖なるものによって支えられている。また人間がみな同一の権利を総体として持っているならば、人はみな権利においても平等であることになる。すなわち平等の要求は普遍性に由来する。男性と女性の平等も当然の帰結である。

こうした普遍性の承認は自らの生まれた社会とは別の社会に対する関心を惹起することになった。旅行者や学者は当初は当然ながら自らの文化に固有の物差しで他の文化を判断しようとする。次には文化の多様性に目覚めることになる。さらに空間的な広がりや時間的な広がりまで拡大されていく。それぞれの時代には固有の価値があることもこうして承認されていくのである。こうした視線が自らの生まれ育った社会に向けられたときに、絶対的なものであったものは相対化される。彼はもはや自らの伝統が世界の自然の秩序だとは考えなくなる。その例としてはモンテスキューによるフランス人の視点からのペルシャ人批判、およびペルシャ人の視点によるフランス人批判がよく知られている。

こうした250年前の啓蒙主義の思想をどのように評価すべきかに関してトドロフ氏は次の二点を指摘する。一つは欧州およびその影響を受けた地域では啓蒙思想が敵対する相手に対して異論の余地のない勝利を収めたこと。宇宙についての知識の進展、個人の私的領分の管理の自由、言論の自由、民主主義の実現、人権の尊重、法の前の平等、個人の幸福の追求などである。もちろんこれらすべてが実現されたとはトドロフ氏も考えてはいないけれども、これらが理想として万人に受け入れられたこと、その理想が脅かされた場合は啓蒙主義思想が批判のための手段となることは確実である。

他方、20世紀のさまざまな災厄、たとえば2度の世界大戦、欧州その他の地域での全体主義の成立、技術の進歩による大量殺人の現実化のため、啓蒙

主義への加担をためらう人が出現したほどであった。それと同時に人道主義、解放、進歩、理性、自由意志などという言葉もその輝きを失った。

理想と現実とのこうした齟齬について氏は以下のように考えている。人類は直線的に無限の進歩を遂げるという楽天的な考えは啓蒙主義の思想家たちを誘惑した。彼らに先駆けたミルトンは、人間は理性の自由な行使によって成熟できると考えた。フランスではチュルゴーがほぼ同様の信念に到達した。ヴォルテール、ダランベールらも大体同じ道筋を歩むことになった。またコンドルセは恐怖政治のさなかに『人間精神の進歩についての素描』を書き残した。彼らはいずれも人間は文化と知識の普及によって成熟することのできる存在であると考えた。

もちろんこうした楽天的とっていい信念が全面的な同意を得られたわけではなかった。たとえばヒュームやメンデルスゾーンはキリスト教の教義の世俗版とっていい、完成に向かって一直線に進行する歩みに賛同しなかった。彼らはある意図の完成として歴史を読むことを否定したのであった。その中でもルソーは最も正面きってこうした考え方に反対した。彼にとって人間という“種”の特質は進歩に向かって歩むことではなく、「これまでよりはよくなる可能性」だった。彼はそのためのあらゆる努力を正当化しけれども、努力はいかなる成功も約束するものではないと考えていた。

その上、ルソーはいずれの進歩も必ず別の分野での退行を伴うものだと考えていた。『不平等起源論』には「偶然に人間を損なうことによってその理性を改良することができた。人間を社交的にすることで意地悪にした」などの言葉が見出される。彼が注意を喚起しているのは肯定的な結果と否定的な結果の関係だった。この二つの動きは人間の条件そのものに由来する。人間は自ら変わり、また世界を変化させることのできる一定の自由を持っており、この自由が人間に善だけでなく悪をもおこなわせる、とルソーは考えたのである。「これまでよりもよくなる可能性」そのものが大きな成功を収める場合もあるし、不幸をもたらすこともある。人間の特質は他者のまなざしから自分の存在感を引き出すものであり、その存在感なしでは生きられ

ない生き物でもある。この欲求は愛という形をとることもあるし、悪という形をとることもある。「善も悪も水源は同じである」とルソーは結論している。

啓蒙主義の精神は人間を外部の抑圧的な監視から解放してくれる知識を称揚する。しかしそれは人間が世界のすべてをコントロールし、それを自らの欲望に従って加工することではない。「結果の大部分は極めて特殊な道筋をたどってやってくるし、極めて知覚しにくいか遠く隔たった理性に依存しているので予測は不可能である」とモンテスキューは語っている。これは社会についての研究にはもっとよく適合する。人間という生き物が自らの自然に背いた予測不能な行動を取る可能性があるためである。社会に関する知識は予測や意志のコントロールの不可能性という問題につきあたる。また人間の意志は自らの行動の理由を知ることの不可能性につきあたる。人間にとって愛情の対象を選ぶことは最も重要な問題であるが、その選択の核心を知ることは不可能である。ユートピア志向が挫折に終わるのはそのためである。

今日のわれわれが自らの直面した困難と闘うため啓蒙主義に支えを見出そうとしても、18世紀の思想がそのまま今日に当てはまるわけではない。時代が変わったこともその原因であるが、啓蒙主義思想自体が一つではなく、複数の啓蒙主義思想が存在しているためでもある。だから必要なのは啓蒙主義思想の再構築である。そのためには過去の遺産の継承は必要であるけれども、その再検討が必要である、とトドロフ氏は考えている。

2 拒絶と逸脱

啓蒙主義思想はそれが形成された18世紀当初から多くの批判にさらされた。それは教会の権威からのものと、市民の側の双方からのものだった。批判はその後のさまざまな政治的事件の結果、ますます激しさを増した。とりわけ「啓蒙主義思想即フランス革命、フランス革命即恐怖政治」という二つ

の等式が多くの人々の頭脳を支配した。「フランス革命は人権宣言で始まったがゆえに流血の中で終わることになった」という議論まで飛び出す始末であった。啓蒙主義の犯した過ちは人間を理想の源泉としての神の位置に置いたこと、集団的な伝統の代わりに個人が自由に使用したいと思っている理性を重視したこと、ヒエラルキーの代わりに平等をもってしたこと、単一の神を崇拜する代わりに多様性崇拜をもってしたことなどであると批判された。もちろんこうした批判は大筋において啓蒙思想の骨格をほぼ正確に理解していた。人間、自由、平等こそ啓蒙主義で重要視されるものだからである。もっともモンテスキューは自らが支持するこの原理が有害なものに変質する危険性を自覚しており、理性の行き過ぎや自由の害毒を懸念していた。ルソーも「物質主義の現代人」との論争を開始しなければならないと考えていた。

啓蒙主義に投げかけられた非難にはそれが19世紀および20世紀前半のヨーロッパ諸国の植民地主義の理論的支柱であったというものもある。その論拠は以下のごとくであった。啓蒙主義思想は人類の単一性を、したがって価値の普遍性を断言した。ヨーロッパ諸国は自らをより高度の価値の所有者であると確信し、自らよりも劣った価値しか持たない人々に優れた価値をもたらすことを許されていると信じ、それを確実に実行するためには土地を占領しなければならない、と考えた。

たとえばコンドルセはこうした任務は文明国の義務であると考えていた。彼は均質な普遍的国家の建設を夢見て、ヨーロッパ人が介入すればそれが可能になると考えたのであった。コンドルセから100年後の植民地主義のイデオログたちは自己正当化のためコンドルセと同じ議論に依拠することになった。子供を育てる義務があるように遅れた国々を発展させる義務がある、というのである。スペインやポルトガルによる16世紀の新大陸進出の論理も、キリスト教を野蛮な人々に布教する、というものであった。

しかしながら、植民地主義者たちは自らが攻撃の対象とされるにつれて、人道的な議論をかなぐり捨てていった。今日から見れば植民地政策は啓蒙主義の理想を隠れ蓑にした国家利益の追求であった。啓蒙主義に投げつけられ

たもう一つの大きな非難は、それが20世紀の全体主義を生み出した、というものであった。その論拠は以下のごときものであった。神を拒絶した人間は自らを善と悪の基準として採択した。人間は自らの能力に酔いしれ、世界を自らの理想に沿うような改造を目論むようになった。そうする過程で人間は無数の人々を殺害したり奴隷化したりした。こうした非難は主としてキリスト教関係者から投げつけられた。T・S・エリオット、ソルジェニツイン、教皇ヨハネ＝パウロ二世らがその代表的な名前である。

エリオットは第二次大戦勃発の際、全体主義に対する真の反対勢力はキリスト教会であり、それ以外にはない、と主張した。「もし神を持たないのであれば、ヒトラーやスターリンに服従しなければならない。」

しかし、こうした歴史の見方に従うと全体主義国家と民主主義国家の相違はあいまいになってしまう。実際エリオットにとってはどちらも同じ無神論、同じ個人主義、同じ物質的な財に対する渴望から生まれた同じイデオロギーの変種だった。

ここで啓蒙主義思想に向けられた異なる非難を腑分けしなければならない。ナチスと異なり、共産主義は啓蒙主義の後継者であることを宣言していた。しかし、仔細に検討すれば直ちにわかるように、両者はほとんど無関係の存在だった、とトドロフ氏はみなしている。共産主義社会では個人の自律はほとんど皆無であったし、平等の原則は権力中枢の確固たるヒエラルキーのため有名無実だった。さらに知識の追求もイデオロギー的なドグマの支配下に置かれた。個人は自らの幸福の追求ではなく、遠い未来の集団的救済という祭壇に自らをささげなければならなかった。物質的な価値は勝ち誇るどころではなかった。共産主義は豊かな社会建設に失敗したからである。共産主義は政治的な宗教というべきで、啓蒙主義とも民主主義とも無縁の存在だった、とトドロフ氏は断定している。

自律の要求が強くなりすぎると知識は道徳に監視されるのを免れ、真理の探究は善という至上命令を免除されることになる。極端な場合、社会の価値は知識により指図されることになってしまう。こうした科学万能論は20世紀

の全体主義によってその暴力の正当化に利用された。科学によって明らかにされた歴史の法則はブルジョアジーの没落を予告している、という口実でブルジョアジーに属する人々が次々と殺害された。

また科学により明らかにされた生物学の法則は特定の「人種」が劣等であることを証明した、という口実でナチスはそうみなされた人々を死に至らしめた。こうした暴力は民主主義国家においてはあり得ないことであるけれども、そこでもある決定の正当性を主張するために科学が引き合いに出されることが少なくなかった。科学万能主義は危険であるが、それは啓蒙主義から導き出されたわけではない、とトドロフ氏は考えている。というのも、啓蒙主義は世界が科学者の視線に対して全面的に可視的であるとは考えてはいないからである。

啓蒙主義には確かに彼らに指摘されるような自律、人間中心主義などの特徴がある。啓蒙主義はそれゆえ主観的で、人間の意志にのみ依拠し、神の言葉に客観的な基礎を置くゆえに不動の姿勢を保つことのできるキリスト教道徳と異なり、権力者の圧力に屈服しやすい、という批判にトドロフ氏は次のように反論する。キリスト教徒は客観性を主張するけれども、それは真に客観的といえるのであろうか。神と直接コンタクトを取ることは誰にも不可能であり、人間は預言者とか神学者といった信頼される仲介者に依存せざるを得ない。宗教の正当性はわれわれに伝統を伝えた一群の人々によって担保されているのである。このように述べた後で、啓蒙主義の道徳はキリスト教徒が批判するように主観的ではなく、間主観的なのだと主張する。善と悪の原則はコンセンサスの対象であるが、理性に基づく議論を積み重ねながら到達されたコンセンサスは、可能性としては人間全体のコンセンサスといえるのではないか。

啓蒙主義に固有の正義の概念は批判者たちが言うほどには革命的ではない。法は確かに人民の自律的な意志の表現ではあるが、この意志は制約によって抑制されている。モンテスキューは古代人に学んで正義は法よりも古く、法の上位を占めるものであると語っている。「正義は人間の法に依拠す

るものではなく、理性的な人間の存在と社交性に基づくものであり、人間の個別的な意向や意志に基づくものではない」とは彼の著書『義務論』の言葉である。

こうした原則はコンセンサスの対象であるだけでなく、今日では憲法やその前文にも記述されている。

3 自 律

啓蒙主義思想の出発点においては外部から押し付けられた規律からの解放と、自ら選択した新たな規律の建設があった。ルソーはよき市民は「自らの判断基準によって行動する」ことのできる人であると考えた。またディドロはそれを「偏見、伝統、すべての人々の同意していること、権威などを足蹴にして、あえて自発的に考える」人のことであるとした。18世紀末になるとカントが「自分自身の悟性を使用する勇気を持つ。それが啓蒙主義の標語である」とか「自ら考えるという行動基準が啓蒙主義である」と定義した。

すべてのものが検討や批判の対象となる、というのがディドロやコンドルセたちを含めた人々の共通の了解事項であったが、これは人間が先祖から伝えられた遺産をすべて放棄しても生きられるという意味ではないことにトドロフ氏は注意を促している。そして偏見なしに思考できると想像する事こそが、偏見の中でも最悪の偏見であると語る。伝統は確かに人間を構成する要素ではあるが、それだけでは一つの原則を正当化することも、一つの提案を正当なものとすることもできない。

18世紀には権力の起源と正当性について二つの解釈が争っていた。一つはいわゆる王権神授説で、もう一つは権力の源は人民にあるとする主張であった。しかし、一見相反する二つの主張が争っていたからといって、それは直ちに王権を打倒するという方向に進んだわけではなかった。当時の支配的な意見は、権力は王権に委ねられているだけであり、王は人民に責任を有する、というものだった。したがって王の支配は国の利益に資するものでなけ

ればならなかった。

ルソーが『社会契約論』において表明した過激な思想が述べられたのはこうした状況下においてであった。彼は断固としてすべての権力は神ではなく人間に由来する、という考えを選択しただけでなく、この権力は譲渡することはできず、ただ奉仕する人物に預けることしかできないと宣言した。人民は一時的に権力を政府に預けただけであるから、いつでも取り戻すことは可能である。共通の利害こそ唯一の正統性の根拠であるが、それはルソーのいわゆる一般意志の中にも表明されている。そして一般意志は現実においては法という形式を採用する。法によって支配される国家を「共和制」と呼ぶのであれば「すべての正統な政府は共和制である」。ルソーの宣言から何年か後、英国の植民地において一群の人々が彼の議論をもとに、自由に自らの意志で政府を選択する権利を宣言した。こうしてルソー流の最初の近代的な共和政体が樹立された。アメリカ合衆国の誕生である。さらにそれから何年か後にはフランス革命においても同じ思想が主張されることになった。

人民の解放と平行して個人はまた自らの自律をも獲得した。個人は古い権威に頭を下げることなく、世界の知識に分け入り、また自由に宗教を選択し、公共の場で自らの考えを表明する権利を手に入れ、私生活を自らの希望通りに組み立てる権利をも手中に収めた。ただここで注意すべきは、啓蒙主義者たちが経験と理性に特権的な重要性を付与したからといって、彼らは人間が理性的な存在ではないことを十分にわきまえていたということである。「理性は情念の奴隷であり、それ以外の存在ではありえない」とはヒュームの言葉である。また彼は「私の指の引っかき傷よりも世界の破壊のほうがいいと考えるのは理性に矛盾しない」とまで述べているほどである。つまり、理性は善悪にかかわらず行使される可能性があることを彼らは認めていたということである。

自律は望ましいものではあるが、それだけでは十分ではない。人間は社会の中で生まれ、育ち、そして死ぬ。子供の意識の起源にあるのは自らに注がれる他者のまなざしであり、子供が言語に目覚めるのは他者からの呼びかけ

である。存在しているという意識も他者との交渉から発生する。

人は周囲の助けがなければ人間になることはできない、と説いたのがルソーである。彼の証言は、彼自身交際が得意ではなく社交嫌いの人物であっただけに貴重である。「われわれのもっとも穏やかな生活は相対的かつ集団的なものである。そしてわれわれの真の「自分」はすっかり自分の中にあるわけではない。われわれはこのようにできているので、他者の助力なしで自らを楽しむことはできない。」だからといって、これは社会における生活のすべてがよいものであることを意味するわけではない。ルソーは流行や噂話などの圧力下での自己疎外には絶えず注意するよう促した。他人の視線を気にするあまり外見を取り繕うことが唯一の目的と化してしまうことがあるからである。

啓蒙思想からの逸脱はその誕生直後から既に始まっていたことをトドロフ氏は同時に指摘する。たとえばそれはサドの著作において顕著である。サドによれば孤独こそが人間の真実である。「人間はみなばらばらに生まれてくるのではないだろうか。さらにいえば互いに敵同士で、耐えざる戦争状態にあるのではないか」。サドはここから大切なのは自分の快樂で、他人のことは考える必要はないと語る。こうしたサドの見解についてトドロフ氏は啓蒙主義の精神に反するばかりでなく、われわれの単純な常識にも反する、としている。子供が母親なしで孤立して生まれたのを、さらには一人で生き残った例を目撃したことがあるか、と氏は問いかける。見捨てられた子供は介護不足で死んでしまうのであって、「耐えざる相互の戦争状態」で死ぬわけではない。長期間にわたり庇護なしで成長できない弱さこそがすべての人間に備わる同情の根底にある、と氏は考えているのである。

自律について二つの主張がなされたとき、それを考えた人々は両者の間に争いが起こることを予想してはいなかった。しかしコンドルセだけは例外だった。議会で席を占めた彼は、自らもその一員である権力の制御不能状態を目撃することになった。彼が集団の権威が誤って個人の自由を侵害すると警告を表明したのは公教育についての諸問題についての熟考を通じてであっ

た。コンドルセによれば学校はあらゆるイデオロギーを叩き込むことを慎まなければならない。彼は「もし社会が次の世代に信じるべきことを命じた場合には、さまざまな意見を持つ自由はもはや見せ掛けに過ぎなくなるだろう」と懸念を表明したのだった。

こうした教育がなされた場合、それが人民の意志に基づくものであっても、必ず圧制となるであろう。「教育の目的は出来合いの法律を人々に賛美させることではなく、彼らがそれを評価し、訂正できるようにすることである」。トドロフ氏はこうしたコンドルセの先見性を極めて高く評価している。コンドルセは18世紀において既に共産主義やナチスの圧制を予見していたように見える。これらの圧制が20世紀末に終末を迎えた後、啓蒙主義とは正反対の逸脱がありうることに氏は注意を促している。氏によれば個人の自由を蹂躪するのは国家だけとは限らない。極端に強大な力を持つ何人かの個人もまた人民の主権を制限する可能性がある。それは独裁君主ではなく、強大な財政的手段を所有する個人である。

氏は国際関係にかかわる人民主権の衰退の例を二つ挙げている。第一は経済のグローバリゼーションに由来するものである。今日では国家は国境を武力で守ることはできても、資本の流通を止めることはもはや不可能である。したがって、政治的にいかなる正当性を持たない個人あるいはグループでもコンピュータ操作一つである国から別の国に資金を移動して、ある国を大混乱に陥れ、大量の失業者を生み出すことが可能である。

もう一つは国際的なテロに由来するものである。これらはすべて個人あるいはグループに由来するものである。今日では技術の進歩により、高度な武器の製造が容易になっている。しかも低価格なので、誰にでも作ることができ、しかも小型化されているので、移動運搬も極めて容易になっている。そして爆弾を破裂させるには携帯電話を持つだけで十分である。

今日われわれは自らの決断により行動していると思い込んでいる。しかし実際にはマスメディアが連日早朝より深夜にいたるまで、同じメッセージを垂れ流しており、われわれは自らの意見を持ちにくくなっている。これらの

マスコミ情報は必ずしも間違っているわけではないけれども、選択され、編集され、ある方向へと読者や視聴者を誘導するよう仕組まれているからである。現代のように切れ目なく情報が垂れ流しにされる時代においては、その力は以前とは比較にならないほど巨大である。インターネットの登場はこうした傾向に歯止めをかけると期待されたけれども、トドロフ氏はそれに対しても懐疑的である。ネット上を往来する膨大な量の情報の真偽を確認することは極めて困難であるからである。

世論は非常に強い力を及ぼすために個人の自由が阻害されることになるから、という理由でルソーは相対的に孤独な環境の中で子供を育てるよう推奨した。同じ理由から彼は大都市を好まなかった。しかし、その後世界はルソーの信ずるところとは正反対の方向に進んだ。

啓蒙主義思想が批判精神を涵養したのは確かである。ただ何事も程度が大切で、行きすぎた批判や誹謗、中傷は批判に似て非なるものである、と氏は警告する。またすべてを懐疑的に見て、嘲弄する態度は一見賢そうであるが、啓蒙主義を捻じ曲げ、かえって啓蒙主義の進展の障害物になりかねないと警告する。

4 政教分離

ヨーロッパでは歴史の最初期から、地上の権力と精神的な権力を区別する慣わしがあった。各々がその領域内で相手の侵入から守られて自律を保っているとき、前者は世俗的な社会と呼ばれた。後者についてみると、キリストは自分の王国はこの世には属しておらず、神に服従することはシーザーに服従することと何も矛盾しないと考えた。しかし、コンスタンチヌス帝によるキリスト教の国教化以降、両者をともに支配したいという欲求が目覚めた。地上の秩序は肉体を支配し、精神的な秩序は魂に君臨する。しかしながら、魂と肉体とは単に並列された実体ではなく、それぞれの人の内部では階層秩序を形成している。

キリスト教では、魂は肉体に命令すべきものである。そこから必然的にキリスト教は魂だけでなく、肉体をも制御すべきであり、当然地上の権力に君臨すべきである、という考えが生じた。他方、地上の権力の側は自らの特権を守るだけでなく、教会などの制度を含む一切の地上の問題に対する制御を追及した。両者は相手の領分を侵食せんものと虎視眈々と相手の領分を窺った。この二つの勢力が並存したのが中世という時代であった。

宗教改革がそうした状況に変更をもたらした。それはこの改革が個人に与えた地位のおかげであった。一介の農民といえども神の御前では社会的な身分の上位のものと同様だとされた。ここに個人という第三の勢力が出現して、以前から存在した二つの勢力間の対立を混乱させることになった。

個人は出発点において政治権力の侵入から宗教的経験を守るための枠組みに過ぎなかった。しかしこの枠組みが強力になると、それは国家からも教会権力からも自らを守らなければならなくなった。これが近代における政教分離の意味である。

近代ヨーロッパの歴史はルネッサンスから啓蒙時代まで、またエラスムスからルソーにいたるまで、公的な制度と宗教的伝統との分離の強化の歴史であり、個人の自由の拡大の歴史だった。こうした主張の中で最も興味深いものとしてトドロフ氏はチェーザレ・ベッカーリアの主張を取り上げている。彼はその著書において罪と不正行為の違いを明確化した。この指摘は裁判所の活動を宗教的な枠組みから保護することを可能にした。法律に反することと宗教上の教義とは無関係になり、罪は法律の追及を受けなくなっていった。

ベッカーリアはまた個人の自由に対する別の脅威を指摘している。それはもはや教会からでも国家からの脅威でもなく、家族からの脅威である。とりわけ家父長権が問題とされた。家父長は家族の成員に圧政を行い、社会から獲得した独立を奪ってしまうことがあったからである。

近代の自由な民主主義においては、個人の行為は地上の秩序と精神の秩序の間というよりも、三つの領域のいずれかに属することとなった。一つは私

的で個人的な領域である。ここでは個人はいささかも他人に介入されることはない。反対側には法律の領域があり、個人は国家により厳格な規範を課される。両者の中間には第三の広大な領域がある。ここは公的ないしは社会的な場で、規律と価値が影響力を持つが強制的ではない領域である。

この三つの領域は国により、時代によりさまざまに変化するけれども、それを区別し、その限界を定めることの必要性は万人に承認されている。現代では政教分離は各人が他者の自由を侵食することなく、自宅では主人公であり続けることの中にある。国家が制御するのは法的な領域であるが、国家の意志を市民社会に強制することはできない。市民社会は公的な領域を占めるけれども、その活動は個人の自由を保護する境界線までである。その上、国家は市民社会に対し個人の自由と保護を保証しなければならない。領域間の平衡は壊れやすいものであるけれども、共同体が正常に機能するためには不可欠である。

ここでコンドルセが発見した個人の自律や社会の政教分離にとっての新たな危険の問題に立ち戻ると、この危険は地上の権力を所有するものが国家、その制度、あるいは代表者に対する崇拜を要求する場合である。

こうした新たな宗教ともいべきものは、キリスト教会の支配が及ばなくなったためであった。人々を宗教というくびきから解放しようとした人々がキリスト教に勝るとも劣らぬ抑圧的宗教の推進者となる危険が新たに生じたのであった。

コンドルセはこうした危険を次のように読者に提示した。「向こう見ずな偽善者たちの一団」が中央の権力を掌握し、国中の中継地点を手に入れる。そして主要な情報源を手中に収める。そうすれば人民は「教育の不足により恐れという亡霊に抵抗することなく委ねられる」。この一国は誘惑と脅迫とを交互に用いて「自由のマスクをかぶったまま」圧政をおこなうことになる。

こうした権力のすべては先行する圧制よりもむしろたちの悪いものである。というのは、新たな政治的宗教は人々の地上での生活のすべてに忍び込

むことになるからである。伝統的な宗教は自ら地上の権力を行使し、場合によっては地上の権力に束縛の任務を課すことによって個人の良心（信条）をコントロールしようとした。政治的な宗教の場合はすべてを直接的に監視し、導こうとする。

ジャコバン党による恐怖政治は既に第一の「政治的宗教」を具現していた。しかしコンドルセが最も恐れていた事態が現実化したのは、それから130年を経た20世紀初頭のことであった。第一次大戦後の Kommunismus および ナチズムの台頭である。こうした事態が発生したころ、コンドルセは忘れられた思想家になりかけていた。

政教分離の機能していた時期には一方がもう一方に服従するよう求められることはあった。しかし、新たな政治的宗教においては、両者の区別は取り払われて、国家、人民、党あるいは政治権力そのものの神聖化が押し付けられた。

伝統的宗教は打倒され、排除される（共産主義の場合）か、支配下に組み込まれ、周辺に追いやられた（ファシズムやナチズムの場合）。こうして世俗的な権力と宗教的な権力が融合して全体主義体制が完成した。

今日、西欧諸国では政教分離がおこなわれているけれども、1990年代以降のイスラムの登場により事情が変わってきている。このことは多くの国の社会に大きな影響を及ぼしている。とりわけテロリストの活動と女性の隷属という問題である。ヨーロッパに居住するイスラム教の代表者には男女の不平等を主張するものが存在する。

イスラム教の経典を文字通り受け取り、処女性や貞節を求めることで女性の身体のコントロールが目論まれ、既婚女性は家の外で働くことや、外出して見知らぬ男性の視線にさらされないよう求められている。

フランスでは「売春婦でも従属した女でもなく」という運動が女性の権利のための戦いに参加した。しかしこの女性たちの主張は抑圧された。現在オランダの代議士であるアヤン・ヒルシ・アリはソマリア生まれの無神論者であるが、イスラムの教育を受けてきた。彼女は何年前から、殴られ、暴行

され、重傷を負わされた女性たちを保護し、援助するために戦っている。彼女の作品を映画化したテオ・ヴァン・ゴッホが暗殺されたことは記憶に新しい。彼女が主張するのはイスラム原理主義者が主張する規律への服従の拒絶と、個人の自由および男女の平等である。彼女の主張は選択すべき問題ではなく、国法に記載されている「普遍的な価値」に属する問題である。

伝統的な社会では、聖なるものは宗教的な教義により定義される。フランス革命は国家を聖なるものにした。祖国愛が神への愛の代替物になった。全体主義体制は神の地上の代用である人民、党、労働者階級を神聖化しようとした。現代の民主主義国家では神聖化されるものはなく、すべては批判の対象となる。たとえばユダヤ人虐殺とかレジスタンスでさえも公的領域においては聖域ではなく議論の対象になりうる、と著者は考えている。

しかしわれわれの住む世俗的な社会からは聖なるものがすべて除去された、というのは正しくない。それはわれわれの内なるある種の自由、すなわち自らが選んだ宗教を信じる権利であり、制度を批判し、自ら真実を追求する権利である。また人間の生命は聖なるものである。だからこそ国家は死刑を執行することによって聖なる生命の侵犯を自らに禁じたのである。拷問の禁止も同じ理由による。さらには自らの意志の自律を行使できない女兒の割礼も禁止された。

5 真 理

自律の領域を限定するには、善を推し進めるための言説と真理を打ち立てるための言説を区別するのが便利である。啓蒙主義の思想家たちは人間と世界についての知識から宗教の支配を排除するため、こうした区別の必要性を痛感していた。そのためヴォルテールは科学が一つであるのに、宗教が複数存在することを指摘して人々に注意を促した。この見分けやすい相違には多くの含意があった。とりわけ、それはどのような権力者も真実を知ろうとする言説に支配力を及ぼしてはならないことを意味していた。なぜなら両者は

別の範疇に属する事柄だからである。「たとえすべての人が太陽は動き、地球は不動であると結論しようと、それとは無関係に太陽は不動である」とヒュームは述べた。真理を投票で決めることはできないのである。

ヒュームに続いてこの問題を扱ったのはコンドルセである。彼がこのテーマに接近したのはプロテスタントの教師にもカトリックの教師と同じ資格を与えるべきであるという要求をめぐってのことであった。彼の要求の背後には、教えるものが教義についてではなく科学である場合、教師の宗教は無関係である、という信念があった。ニュートンの理論を教えるのに教師がカトリックかプロテスタントかは無関係である。

コンドルセの目指したのは個人の自律であり、存在している規則を批判的に検討し、自らの行動の規則を選択する能力を養成することであった。個人の自由を守る、ということは事実と解釈、科学と意見、真理とイデオロギーの相違を認識できることであった。

共和制は二つの対照的で正反対の危険に絶えず脅かされている。それは道徳至上主義と科学万能主義である。前者は善が真理を支配する場合や、事実が意志の圧力に負けて捻じ曲げられる場合に、後者は価値が知識から派生するように見える場合や、政治的な選択が科学的な結論に形を変えてしまう場合に猛威を振るう。

コンドルセは道徳至上主義の誘惑に抵抗するよう注意を促している。彼がこうした考察を進めていた恐怖政治という道徳至上主義のもとでは独立した真理にはもはや場所が残されてはいなかった。やがて恐怖政治はコンドルセ自身の場所をも奪うことになった。

科学万能主義は近代になって誕生した理論であるが、世界を完全に知ることとは可能であり、世界を人間の目的に応じて変えることができ、さらには人生の目的自体が世界についての知識から導き出されると考えた。すなわち、善は真から生まれる、という理論である。啓蒙主義思想自体も科学万能主義の誘惑にさらされた。たとえばディドロは「自然」の法則こそわれわれの行為が従うべき唯一のものである、と考えていた。

この理論は政治や秩序に応用されると「真理を知り、それを社会秩序に一致させる。これこそ公的な幸福の唯一の源泉である」というコンドルセの言葉になる。彼は真理が善の「唯一の源泉」であることに不都合を覚えなかった。著者は多くの点でコンドルセに高い評価を与えているけれども、こうした科学万能主義的側面には批判的である。

モンテスキューやルソーはこうした考えに反対であった。知識の蓄積と道徳的、政治的な完成とが自動的に接続している、という幻想を追放することこそルソーの考察の出発点であった。彼は多くの同時代の百科全書派やフィロゾーフたちとは対立した。ルソーによれば人間をよりよいものにするためには「啓蒙する」だけでは不十分だった。「われわれは学者でなくても人間になることができる」。

20世紀の全体主義に深く浸透した科学万能主義は今日では否定されている。しかし、現代の民主主義はその影響を清算したわけではなく、影響は形を変えて存在している、とトドロフ氏は考えている。たとえば、道徳の基準や政治の目標を「専門家」に委ねようとする傾向である。まるで善の定義は知識に属する問題であると考えられているみたいである。あるいは、人間についての知識を自然についての知識から吸収して、道徳や政治を物理学や生物学の法則に依拠しながら打ちたてようとする「社会生物学的な」計画も同じである、と氏は考える。西欧の国々ではいくつかの倫理委員会で生物学者が最もふさわしいとされることに氏は疑問を持っている。また別の委員会は科学者と宗教家という二種類の人間から構成されている。まるでその中間には適当な人材が存在しないとでも考えられているようであるし、情報さえ提供されれば優れた決定が可能であると考えられているみたいでもある、と氏は現状に不信感を表明している。

情報をたくさん集めたからといって人間が今以上に立派になるわけではないし賢くなるわけでもない、と考えたルソーの見解に氏も同意している。それどころか情報の蓄積や転送手段の目もくらむような発達も新たな危険をもたらしている。あまりにも多くの情報はかえって情報を損なう可能性がある

からである。たとえばインターネットである項目を検索すると10万件以上もの情報が示される場合がある。それらから適切なものを選択するのは至難の業である。

また知識はすべて科学によって与えられるわけではない。たとえば人間の行動の謎を極めるには偉大な小説を読むほうが、社会学を勉強するよりも有効であるかもしれない。

善の欲求に対する真理の探求の屈服を意味する道徳至上主義は啓蒙主義よりも古くから存在し、啓蒙主義と真っ向から対立してきた。その例としてトドロフ氏はフランスの海外植民地、とりわけアルジェリアの植民地化を積極的に評価する法案の可決を例に挙げる。過去の歴史の解釈を法律で確定し、それ以外の解釈を処罰することになれば、それは教会によるガリレオの処罰と同じである、と氏はフランスの現状に危機感を募らせている。他国に誤った理由によって侵入して、土地の人々を法的に劣った地位に貶め、本国では尊重されていた共和主義的な原則を植民地では無視し、独立運動に立ち上がった人々を虐殺し、拷問にかけたことには積極的に評価すべき点など何もない。

この決定をおこなう前に、フランスの議会はトルコをアルメニア人虐殺のかどで有罪であるとし、第二次大戦中のユダヤ人虐殺を否定するものを処罰する、などの決議をおこなってきた。「公的権力は真理がどこにあるかを決定する権利はない」というコンドルセの言葉を自らの信念とする氏にとっては容認できない事態である。真理は善を命じることはできないけれども、同時に善も真理を服従させることはできない。科学万能主義も道徳至上主義も啓蒙主義とは無縁のものである。第三番目の危険は、真実という概念そのものが正当なものではないと見なされることである。ジョージ・オーウェルの『1984年』を論じた研究において、L・コラコフスキーは作者が全体主義体制における真理の検討の重要性を指摘した点を賞賛している。

こうした危険は全体主義国家だけの問題であるとわれわれは考えがちであるが、トドロフ氏は近年のアメリカにおけるいくつかの事件を手がかりにし

て、民主主義国家にとっても他人事ではないと警告する。その第一の例として氏が取り上げているのは、アメリカのいくつかの学校ではダーウィンの進化論と聖書の天地創造が同じように尊重されるべき「仮説」とされている事実である。個人がそのように信じるのは勝手であるが、学校のカリキュラムでそれを同等のものと扱うことには問題がある、というのである。

二番目には近年のイラク戦争の正当化の問題が挙げられる。アメリカはイラクが大量破壊兵器を所有していることを開戦の口実とした。そのためアメリカの指導者たちは自ら断言していることが嘘であることを承知しながら、真実であると言い切った。続けて著者はアメリカの指導者たちがグアンタナモ基地における捕虜の待遇は戦犯に関する国際条約に違反していないとか、イラクは日々平和と民主主義に向かって大きく前進しているなどと言い張り、地球温暖化にかかわる科学的な資料を改ざんした点なども同根の問題であると考えている。そして真実という規定を手直したのであれば、もはやアメリカという体制は自由な民主主義とはいえないと判断している。

6 ユマニテ

啓蒙思想が人間の行動の理想を描き出す際に自律のみで十分と考えられていたわけではない。もちろんよそからの指示によって動くよりも自らの意志によって動くことのほうが好ましい。しかしもはや価値の基準を神に求めることはできないので、地上の現実で、すなわち人間そのもので満足するほかはない。そして人間の幸福を増進するものが善である。これはキリスト教の教義の否定ではなく、その修正である。キリスト教は神への愛と隣人への愛を説いているからである。

だから啓蒙主義が主張されても、それは教義的、制度的な枠組みが遠ざけられたただけであって、従来認められてきた価値が否定されたわけではなかった。フランクリンは「神に対する最も愉快な崇拜は人間に対して善をなすことである」と述べた。人間に対する愛に神という口実は不要だったのであ

る。

「あなたに私の家を提供するのはキリストへの愛ゆえではなく、あなたに対する愛ゆえです」。ルソーは主人公ジュリーに「人間は単なる他人のための手段となるにはあまりにも高貴な存在です」と語らせている。「他のすべての人をあなたが自分自身を扱うように扱いなさい。同時に必ず相手を目的として扱い、単なる手段として扱わないようにしなさい」というカントの言葉がすべてを要約している。

幸福を追求することは正当化され、救済に取って代わった。それでは幸福の鍵はどこに求めたらいいのか。哲学者たちや大多数の作家は社会改革を進めるのではなく、個人の経験を強調した。その中では個人を周囲の人物に結びつける愛情が第一の地位を占めていた。「愛情と友情を取り去ってごらんなさい。世界には何か受け入れる価値のあるものが残るでしょうか」とヒュームは述べている。

ルソーもヒュームとまったく同意見であった。「何も愛さない人間が幸福になれるとは私は思わない」。生きるためには他人の愛情が必要であるが、その永続性を保証するものは何もないので極めて壊れやすいものであることは否定しがたい。

18世紀末になると幸福の追求は個人の目的であるだけでなく、国家の目的にもなっていった。「幸福の追求」はアメリカ合衆国の独立宣言に取り上げられた。フランスでは著名な化学者にして政治家でもあったラヴォアジエが「すべての社会制度の目的は法の下で暮らす人々を可能な限り幸福にすることである」と三部会に提言した。しかし彼自身が革命の犠牲となって命を落としたことが端なくも示したように、生活のすべてを政府に委ねることは不適切であることが明らかになっていった。

啓蒙主義の反対者たちは神がなくなれば社会が崩壊するのではないかと恐れていた。神が死んだのならすべてが許される。秩序が支配するためには神の権威が必要だった。全体主義のイデオロギーは啓蒙主義思想の持つユニスム（ヒューマニズム）を拒絶した。そのため全体主義国家の目的はもはや

「個人の幸福」ではなく、共産主義国家とか人民とかいった抽象的なものにとって代わったのである。

啓蒙主義の精神は行動と行動の目的の距離を縮めたことであった。行動の目的は天井から地上に降り、神のうちにではなく、人間のうちに求められた。しかし啓蒙主義からの逸脱は神の目的だけでなく、すべての目的を打ち捨ててしまい、運動のための運動、力のための力、意志のための意志しか求められなくなっていった。現代は多くの点で目的を忘れ、手段を神聖化する時代になった、といえる。経済は発展のための発展、成長のための成長という路線をひた走るばかりである。

政治の世界も同様に、なんらかの理想の実現のために政治家になるよりも、自らの権力欲を満たし、それを可能な限り長期間保持し続けることを目的とする政治家が多いのではないかと著者は疑っている。それを証明する最近の例として氏は2005年5月29日に実施された欧州憲法の批准をめぐる国民投票を挙げている。シラク大統領によるこの決定は驚きをもって迎えられた。なぜなら先立つ二度の選挙で与党は敗北を喫しており、大統領が強行策によってさらに敗北を重ねることは容易に予想できたからである。

しかも議会内ではこの憲法の批准には与野党挙げて賛意を表明していた。なぜシラク氏が敢えて危険な賭けに出たかに関して、著者は2007年度の大統領選挙を視野に入れた行動だったと理解している。左派を支援する選挙民を分断して弱体化しようとしたのだ、と考えられるからである。大統領は憲法批准という大義よりも、自らあるいは後継者を大統領に据えて、自らの権力を保持し続ける道を選んできたのである。

そして社会党のロラン・ファビウスは批准反対を表明して周囲を驚かせた。彼はもともと批准賛成だったにもかかわらず、大統領選への過度の配慮のため、政治的信条を売り渡したのである、と著者は考えている。

7 普遍性

自らの周囲を見回したとき、ルソーは権利の平等も事実の平等も見出すことができなかった。そして彼は『人間不平等起源論』を書くことになったのであるが、それは次のような厳しい確認で終わっている。「一握りの人々は贅沢に包まれている一方、飢えに悩む多くの人々が必要なものをもたないのは、明らかに自然法に背いている」。そこで彼は正義の国の作り方について考察を重ね、『社会契約論』において法の前における厳密な平等の要求に到達した。

「社会契約は市民の間に全員が同一の条件で義務を負う平等を確立し、同一の権利を享受しなければならない」。国を支配する意志は、いかなる声をも除外することがなくなって始めて一般的といえる。

18世紀末のフランスはこうした要求を満たすことからは程遠かった。フランス人はカーストに分割されていた。女は男と同じ権利を持たず、奴隷はまったく権利を持たなかった。ルソーの主張が部分的に実現するにはフランス革命を待たなければならなかった。2月革命後に奴隷制度は廃止されたけれども、女性の参政権獲得にはそれからさらに百年の歳月が必要であった。さらに現在もなお差別は残っており、平等の要求は今日的な意義を失っていない、と著者は考えている。

平等は市民の権利や人間の道徳の基礎をなすものである。人間はただ人間であるというだけで平等な権利を持っているのであろうか。この問題について考察を重ねたのは近代の自然権学派の人々で、この権利の起源を宇宙論的な秩序や神の言葉の中ではなく、われわれがみな同一の種に属している事実の中に求めようとした。18世紀半ばにクリスチャン・ヴォルフは「普遍的な権利は存在する」と考えた。しかしながら、この権利は人々が市民として享受している権利と同等には受容されなかった。

したがってこの普遍的な権利は道徳の原則に似ており、強制力はなく、到

達目標とみなされる存在であった。しかし、国家は自ら自発的にこの権利を憲法に組み込むことは可能である。1776年のアメリカの権利宣言や、1789年のフランスの人権宣言はこうして実現したものであった。

今日では人権は多くの国で大きな威信を持ち、ほとんどすべての政府が自らをその保護者と名乗っている。しかし事態の変化により人権がかなぐり捨てられることもある。

著者はここで再度死刑制度を取り上げている。啓蒙主義思想の見地から死刑制度を詳しく論じたのはベッカーリアである。彼によれば人間はすべていかなる国家に属するか否かとは無関係に人間という種に属するものとして生命権を持っており、これは譲渡不能である。ベッカーリアによれば、死刑という制度はあの世の存在を前提とした制度である。なぜなら、死刑にされたものはあの世に行って自らの犯した過ちの重さを量ることになるからである。そうでなければ、教訓は生かされることなく失われてしまう。

死刑についてはもう一つしばしば主張される意見がある。それは死刑の抑止的な効果である。見せしめによる抑止力への期待である。しかし死刑制度の有無と犯罪率の間には相関関係のないことが今日では多くの国で立証されている。ベッカーリアは死刑が殺人の模倣である、と考えていた。平和な時代に禁止されている殺人は、いったん戦争が始まると奨励されるようになる。戦争とは法が機能不全に陥った状態であり、合法的に軍事行動を模倣して死刑を執行することは法の理想そのものを危うくするのではないか、と著者は考えている。拷問についても同様に、日常は法によって禁止されている暴力が自白を引き出す目的で正当化されることの問題点が指摘されている。また、拷問を加える人物を内的に崩壊させる危険についても著者は警告を発している。

最近ではイラク戦争をめぐるアメリカ軍の拷問がしばしば話題にされる。アメリカは捕虜をジュネーブ条約にのっとった戦犯として扱うことをかたくなに拒んでいる。ヴェトナム戦争で捕虜となり拷問を受けた経験のある上院議員ジョン・マケイン（現共和党大統領候補）はCIAの刑務所にも他の刑務

所と同じ規則を適用すべきである，という法案を提出した。上院では可決されたけれどもホワイトハウスはこれを拒絶した。恐ろしいのは拷問が容認されていることだけでなく，国内の安全のための戦い，および人権を守るための戦いの名において主張されていることだ，とトドロフ氏は指摘する。自分たちがおこなう拷問が著しく人権を侵害しているのであるから自己撞着もいところである。死刑および拷問は啓蒙主義が主張する普遍主義の拒絶である，と著者は断定している。

トドロフ氏はアメリカなどの死刑や拷問の容認論は普遍と特殊，一体性と寛容の間の不均衡であるとし，啓蒙主義はその片方ではなく，双方を満たさなければならないと考えている。一体性を強制するためすべての手段が許容されれば，個人の自由は危うくなるからである。しかし逆に人権が公的な場所唯一の異論の余地のない指標であり続け，言論および行動の正当性を計る物差しとなった場合には魔女狩りのごとき様相を呈することになる。美德のエスカレートはそれ以外のものを抑圧してしまうので，こうした道徳的な脅しは民主主義にとって有害である。

同じ理由により，国際的な正義は普遍的な道徳の役割を望んではならず，現実に存在している契約や条約に依拠したものでなければならない。それはEUの国と国とを結び付けている契約や条約のようなものであるべきだ，と著者は考えている。

これはある国が隣国の合法性や人権を再建するために隣国に対して暴力を使用することは許されないことを意味する。頼まれもしないのに介入する権利などは存在しないし，介入すればそうした手段は目的を台無しにしてしまうことになる。

卑しい手段を用いて高貴な目的に到達することは不可能である。というのは，そのような手段を用いていると，途中で目的が見失われてしまうからである。植民地主義者たちは平等をもたらすという口実のもとに原住民たちを屈服させた。今日でも人々に自由をもたらすと称して人々の頭上に「人道主義的な」爆弾を落としている軍隊が存在する。

すべての実践が等価であると考え、人間が同一の種に属することの断念に他ならない、と氏は考えている。文化の多様性に気づいたのは啓蒙主義の功績であるが、過度の相対主義を脱して、共通の人間性を断念しない限りにおいて豊かな実りが約束される、と著者は確信しているようだ。

8 啓蒙主義とヨーロッパ

啓蒙主義の個々の要素は古代以来さまざまな文明の中に存在したのであるが、それが一つのまとまった思想として成立したのはなぜであろうか。

紀元前3世紀のインドにも、8世紀から10世紀にかけてのイスラム世界にも、11世紀から12世紀の中国の宋王朝にも、17世紀から18世紀初頭にかけて奴隷反対闘争の起こったブラック・アフリカにも啓蒙主義と同根の思想が見出される、とトドロフ氏は考えている。

こうした多様な地域や時代に共通する啓蒙主義的要素として、氏は同じ土地に複数の宗教が混在する地域の宗教的寛容を挙げている。たとえばバラモン教と仏教のインド、儒教と仏教の中国、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教、ゾロアスター教、マニ教の中近東などである。

次に挙げられるのは政教分離である。こうした動きがこれらの地域で見られたのは、恐らく複数の宗教の同時存在と関係がある。これらの地域では、人間の社会は純粹に人間的な原理の上に築かれるのがよいことで、それゆえ地上の権力は彼岸との仲介者の手中にあるよりも、君主の手中にあるほうがよいと考えられていた。ここから政治権力の自律性や知識の自律性が誕生した。中国の歴史における多くの技術的な発明は、知識の分野での自由な探求の態度を証明している、と氏は考えている。イスラム教世界での数学、天文学、光学、医学の達成についても同様である。

それだけでなく、すべての人間の平等な尊厳、道徳の普遍的な基礎、人間という種の単一性などもこうした地域においてそれなりの達成が見出される、と氏は考えている。

ただこれらの地域では、啓蒙主義的な精神が社会の上層部のみの所有で、一般大衆のものにならなかった点を著者は指摘する。いわば西欧における「啓蒙専制君主」の段階だったのである。

以上の点から著者は啓蒙主義を西欧人の占有物であるとは考えていない。しかし、この思想が統合されて、諸大陸に広がっていったのが18世紀のヨーロッパからであったのは紛れもない事実である。ヨーロッパにはあり、他の地域になかったものとしては政治の自律、人民の自律、個人の自律が挙げられる。この自律的な個人はヨーロッパでは社会に場所を占めていたけれども、インドでは「出家」であり、イスラム世界では神秘主義者であり、中国では修道士だった。ヨーロッパの啓蒙主義だけが、個人と民主主義という二つの観念の結びつきを用意することができた、とトドロフ氏は考えている。さらにそれを可能にしたのはヨーロッパが一にして複数であったことによる。そして啓蒙主義者たちもその点を認識していた。欧州列強は相互的に一つのシステムを形成し、商業や政治により結びつき、しかも同一の原則に従って運営されていた。

ルソーは「今日ではもはやフランス人、ドイツ人、スペイン人、イギリス人というものは存在しない。いるのはヨーロッパ人だけだ」といっているほどである。しかし、その反面ヨーロッパの住人はそれぞれの相違点にも敏感であった。なぜなら彼らはそこから利益を引き出していたからである。旅行や外国滞在は普通の出来事というよりは不可欠の出来事になっていた。それゆえモンテスキューは大著『法の精神』を執筆する前にヨーロッパをすべて見て回り、それぞれの土地に住む人々の風俗習慣を研究しなければならないと考えた。同様にボスウエルは自らの教育の仕上げとしてヨーロッパ大旅行に旅立った。リーニュ大公は生涯を振り返りブリュッセル・ウイーン間を34回も旅行し、馬車の中で3年以上を過ごしていた、ということを知った。そして「私はどこにいても外国人だ。オーストリアではフランス人であり、フランスではオーストリア人であり、ロシアではそのいずれでもある。これがどこにいても楽しく過ごす方法であり、またどの土地にも縛られない方法で

ある」と書き残した。

ヨーロッパでは圧倒的な強国というものは存在しなかった。ヴォルテールはイギリス、フランス、イタリアを比較して、「私はこの三つの国のうちのどれが好きかを言うことはできないけれども、それぞれの長所を感得できる人は幸せだと思う」と述べた。

ヨーロッパは世界のその他の地域と比べ、そこに成立した国家の多様性において際立っている。たとえばヨーロッパ全土と中国とはほぼ同じ広さであるが、中国が一国であるのに対しヨーロッパには40近くの独立国がある。一見短所とも思われるヨーロッパの特性を啓蒙主義者たちは長所であると考えた。中国人はもともと発明の才に富み、想像力に秀でていたのに、一つの言語、一つ的生活様式、一つの法によって窒息させられ、精神が沈滞に陥ったのだ、とヒュームは考えた。

多様性こそヨーロッパの力の源泉だった。1742年に刊行された『芸術と科学の誕生と発展』において、ヒュームは文化を花開かせる条件はヨーロッパを構成する複数国家の存在である、と主張した。ヨーロッパ諸国は互いにまったく共通性を欠いているのではなく「通商と政治」によって結びついている。そして複数であることが自由な空間を保証している。彼は統一により窒息させられる批評精神が複数性により活性化されることを発見した。その理由は一つの統一された領土は強大な権力を必要とし、その指導者を普通の市民からは隔絶した存在にしてしまうため、指導者の神格化を招き、批判を不可能にしてしまうためばかりでなく、君主の過大評価自体が批判的になることはなく、永続する可能性があるからだと考えた。

以上は中国のケースであるが、キリスト教についても同様のことが言える。カトリックの支配は「あらゆるタイプの知識の衰退をもたらした」。それに対し、宗教改革およびキリスト教のいくつかの形態の認知によって、芸術や科学が花開くことが可能になった。

こうして花開いた芸術や科学は隣接する国々からの厳しい批判の目にさらされ、新たな作品や世界観を生み出す母胎となった。

ヨーロッパ以前に多様性が発展を可能にした地域としては古代ギリシャがある。ギリシャ諸都市の地理的な配置は山脈により分断されて、それぞれの独立を保証した。しかし言語や共通の利害によりコミュニケーションは良好だった。これが単一性と複数性の程よい均衡状態を生み出したのであった。分立した都市国家間の対立と論戦は彼らの知性を鍛え上げた。ヒュームはヨーロッパとはギリシャを拡大したレプリカのようなものだ、という意味の言葉を残した。

ところで人民主権は共通の意志の中に具現されるものである。しかし共通の意志と各個人の意志とはどのような関係があるのであろうか。ルソーはこの問題に答えるため、従来は必ずしも十分に理解されていなかった全員の意志と一般意志とを峻別した。全員の意志とは個々の意志の機械的な総和である。その理想は満場一致である。意見が割れればそれはもはや全員の意志ではなくなってしまふ。したがって全員の意志は全体主義に陥る可能性がある。市民は同一の理想を持つことを要求され、その結果、異説は抑圧され、排除されることになるからである。

それに対し、一般意志は相違を織り込んでいる。「一般性」は法の前の平等として理解されるべきである。市民はすべて排除されることも、他よりも劣ったものとみなされることもない。一般性はルソーによれば個人の意志の「相違の総和」を表すもので「小さな相違点の総和」である。

一般意志は同じものの総和ではない。それは各々の同一性とは敵対することがあり、相違を含む一般性が求められることになる。各々の個人はそれぞれの利害を持ち、当然ながらそれぞれの利害は異なっている。他人に服従を強いることを断念するならば、唯一の解決法は各々が自らの視点の限界を意識し、それを脱却し、一般の利益という視点を獲得することである。そういうわけで、結局のところ民主主義においては、選ばれたものはある特定の立場の人々から選ばれた場合であっても、全員の利害のために行動するものとみなされる。それを可能にするためには、各自は暫定的に自分とは異なる意志を持つ隣人の立場にならなければならない。そして隣人がしたかもしれな

いことを推理し、お互いの相違点を考慮に入れた視点を採用する。このようにして一段と上位の統一の中に相違点を統合することが可能になる。

啓蒙主義の教訓は、多元性は少なくとも三つの方法で新たな統一を生むことができることを言明した点にある。それは競争の中の寛容さを促し、自由な批判精神を発展させ、守り、自己と他者との上位における統合に導く自己解脱を容易にする。EU という企てが成功するためには、関税に関する条約の制定や官僚機構の整備だけで満足するだけでなく、科学的な合理性、法や人権の擁護などを受け入れなければならない。しかし、こうした共通の土台だけでは持続性のある政治的な実態を組織するには十分ではない。それは各国の歴史や文化に根ざす個別の選択によって補完されなければならない。言語の例で説明するのがわかりやすいであろう。英語という国際的なコミュニケーション言語があるからといって、個々の言語がなくなるわけではないのである。

その上、ヨーロッパ諸国は長い歴史を通して、多様なイデオロギーの選択に直面してきた。そして、それぞれの理論がいくつかの理論を生み出してそれにとって代わった。信仰はヨーロッパの伝統であるが、無神論もまたヨーロッパの伝統である。ヒエラルキーの防衛も、平等の防衛も、継続も、変化も同様である。帝国の拡大も反帝国主義運動もあった。革命もあれば、保守主義もあった。ヨーロッパは共通の要素に要約するにはあまりにも多様性に富んでいる。さらにヨーロッパは移民たちのもたらした宗教、衣服、記憶をも受け入れてきた。

相違を消してしまうことなしに統合する能力をもつことがヨーロッパをインド、中国、ロシア、アメリカといった世界の巨大政治組織から際立たせている。ヨーロッパ以外では個人は非常に多様であっても一つの国家に包含される。ヨーロッパでは個人の人権だけでなく、歴史的、文化的、政治的な共同体の権利も認められる。こうした態度は天から授かったものではなく、高い授業料を払って手に入れたものである。寛容と相互理解を具現した大陸になる以前のヨーロッパは苦痛に満ちた分裂、殺戮を伴う闘争、絶え間ない戦

争の大陸だった。こうした長期にわたる経験は数世紀後に平和を享受するために支払われた代償であった。

啓蒙主義思想こそヨーロッパの最も価値ある創造である。そして、この思想は一にして複数であるヨーロッパの空間なしには存在しなかったであろう。ところでその正反対もまた真である。われわれが今日理解しているヨーロッパの起源にあるのは啓蒙思想である。したがってヨーロッパがなければ啓蒙思想はなかったし、啓蒙思想がなかったらヨーロッパもなかった、といっていい。

啓蒙主義思想は過去に属している。しかし、それは「過ぎ去る」ことはできない。なぜなら、啓蒙主義はもはや歴史上に位置づけられる理論ではなく、世界に関する態度だからである。啓蒙主義は現在もなお植民主義やジェノサイドやエゴイズムの支配に対して責任があると批判されているけれども、現在の、また未来の欠陥を取り除くため助太刀を求められてもいる。こうした現状には二つの理由がある。われわれは啓蒙主義思想を攻撃するときも啓蒙の子である。もう一つは、啓蒙主義思想が戦ってきた相手は、当初予想されていたよりも手ごわいからである。啓蒙主義思想の伝統的な敵である反啓蒙主義、恣意的な権威、狂信主義などは切り落とされてもまた生えてくるヒュドラの頭のごときものである。

手ごわさの原因はそれらが自律や対話の欲求といった根絶することのできない人間や社会の特質からその力を汲み上げていることに原因がある。人間は自由や真理を必要とするのに劣らず安全や慰めを必要としている。人は普遍的な価値に賛同するよりも、自らの所属するグループのメンバーを守ることをより好むものである。また暴力の行使をもたらす権力を所有したいという欲求は合理的な議論に劣らず人間という種の特質である。さらには啓蒙主義の鬼っ子である科学万能主義、過度の相対主義も存在している。

啓蒙主義に対する攻撃は決してなくなることはないであろう。だからこそ啓蒙主義を生き生きとした状態に保つことがますます必要になる。過去の作家たちが心底求めていた成熟の年齢に達することはわれわれには許されてい

ない。人間は真理を所有するのではなく、それを探し求め続けなければならない存在である。啓蒙の時代はもう到来したのか、と尋ねられたカントは「いいえ、でもだんだん明るくなっています」と答えた。終わりのないことを承知の上で、日々この労働に取り掛かることが人間の使命なのであろう。